

亡くなられた、多くの方々のご冥福をお祈り申し上げます。

また、この苦勞を胸に秘めて頑張つてこられた多くの方々の、さらなるご健康をお祈り申し上げます。

五十七年ぶりに届いた手紙

愛知県 牧山邦彦

一 肥前平戸から朝鮮に

最近判明したことだが、長崎県平戸市の「松浦史料博物館」に保管されている「増補 藩臣譜略」に、牧山家の記録が残っていた。それによると、牧山家は代々平戸藩士で、松浦家第二十六代鎮信公のときから馬廻役として仕えていて、豊臣秀吉の朝鮮出兵にもお供している。だが、明治維新の廃藩置県によりお役御免となつて、収入の道がなくなり、明治八（一八七四）年生まれ祖父、安房の時代に朝鮮に渡つたとのことで、父、牧山直彦が生まれたのが明治三十五年だから、日露戦争の二年前になる。

祖父は、朝鮮の大邱（現在のテグ）に住んでいて、父は平戸の猶興館中学校から京城医学専門学校に進み、卒業後は大邱道立病院や、釜山府立病

院などに勤務していたので、私は昭和六（一九三一）年十一月に釜山で生まれた。

物心ついたころには元山に移っていて、元山泉小学校に入学したが、父の勤務の関係で、その年の十二月には清津に移転し、翌年一月から清津小学校に転校した。そこで六年間の小学校生活を送り、清津中学校に進学した。

母方の祖父、古市橋之助は三重県鈴鹿市の出身だが、小学校、中学校共に成績優秀で県庁から認められ、のちに朝鮮への派遣官吏として渡鮮した。現在の文部科学省の役人のようなもので、教育関係の仕事をしていたが、今もそのころの写真が残っている。祖母は、同じ三重県の亀山の士族の出である。

母は、兄弟姉妹八人の四番目であった。祖母の弟榊原一光は画家で、若いとき東郷青児らとパリに遊学したとのことで、清津の家には油絵があつたし、叔父と一緒に写った家族写真もあり、母からはよく話を聞かされたものだった。

二 清津・吉州そして富坪へ

フウヒョウ

昭和二十年八月初めは、晴天で暑い日が続いていたが、毎晩真夜中になるとB-29が飛来してきて、寝苦しい日が続いていた。そのころでは珍しく鯖がたくさん獲れて、各家庭に配られたことを覚えている。本来清津は鯖の町で、鯖の大漁は珍しかった。

八月九日の朝、不意に戦闘機による爆撃と機銃掃射を受け、ソ連が対日戦を布告したことを知った。海岸通りとか、汽車長屋とかに対して、無差別の爆撃と機銃掃射で、子供心にもこれは大変な事態になったと感じた。それから、毎日空襲があった。

不安な日々を過ごしているうちに、八月十二日ごろになり、沖合いの方で艦砲射撃の音がし、海岸付近ではエンジン音などで異常な雰囲気になってきた。相生町の高台に上って海を見渡すと、清津港の防波堤の沖にソ連軍の上陸用舟艇や小型高速艇などが、隊列を組んで円を描くように旋回し

ていた。上陸地点の確認をしている模様だったが、後で聞いた話だと、この日は日本軍の反抗で上陸できずに撃退された、とのことだった。

八月十三日朝、隣組の連絡で「大和町から一時避難するように」との勧告があった。用意していたリュックサックを背負い、母、兄と家族三人で家を出た。当時父は、現地召集で第十九師団羅南兵事部勤務の軍医となっていて不在だった。大和町から明治町、弥生町を通って歩いた。途中で艦砲射撃の激しい音がしていた。

弥生町辺りでは陸軍の若い少尉が襷を掛けて抜刀し、指揮をとっていた。本当に若く、幹部候補生出身らしい童顔の将校だったが、革の長靴に緑色系の将校服の姿は今でも目に焼き付いている。

明治町、弥生町の一部では、もう火の手が上がっていた。お互いに「皆無事に避難して日本に帰るように」と励まし合った。

中屋本屋前辺りに来ると、北星町方向から下ってきた一団と遭遇した。その中には、叔父の西島

さんもおられた。叔父は清津水産株式会社の支配人で、母の妹久子の主人で、当時五十歳ぐらいだった。これが運命の出会いとなり、私たちが無事に引き揚げる事ができるきっかけとなった。一緒に避難して再び家に戻ることができると思っていた。

輪城方面に向かい、天馬山の下を通り浦頃町を過ぎ、清津駅前を歩いたが、本当は羅南方面に向かうのが良かったのだが、輪城川付近はソ連軍の上陸地点だった。ここは日本軍との交戦中で、通ることは不可能だった。その日の夕方には輪城に着いて宿泊したが、一晩中艦砲射撃の音が聞こえていて不安になった。

日本の敗戦の報せを聞いたのは、古茂山から茂山に向かう避難列車の中だったと記憶している。多分八月十六日だったと思うが、箱型の貨車の中にいたことだけは、はっきり覚えている。陸軍の兵隊がたくさん乗っていたが、半信半疑だった。不安な気持ちでいっぱい、これからどうなるの

かなどと話し合っていた。無条件降伏の情報は、陸軍の情報将校から流れたと思っていたが、民間人ではこのどさくさの時では何も分からなかった。今の時代のように、SONYのラジオのような高性能の受信機を持つていればすぐに分かるだろうにと思うが、当時はそんなことは夢のようなことだった。

茂山で降ろされて、茂山の民間人の家に何日か世話になった。ソ連軍の小型機による爆撃と機銃掃射が相変わらずあった。軽便鉄道を使って吉州に一刻も早く行きたいのだが、なかなか順番が回ってこなかった。そのころには、陸軍の兵隊と物資の輸送が優先であった。やつとので、陸軍の物資を運ぶ列車に同乗させてもらうことができた。この列車は武器弾薬というよりも、糧秣物資が多かったように見えた。当時から民間では食料品を中心にして物資が不足していたのに、なんと軍にはあるものだろうと思つたものだった。

やつと吉州に着いたときには、もう九月一日に

なっていた。吉州の町に降り立って気が付いたが、町の様子ががらっと変わっていて、朝鮮人の言葉遣いや態度が、日本人を蔑視の目で見るようになっていた。町中のそこそこには、韓国旗の大極旗がたくさん掲げられ、「マンセー！ マンセー！」と朝鮮人が歓声をあげていた。国が敗れるということが、いかなることかを初めて切実に体験して、異様な思いをしたものだった。

日本統治の時代でも、吉州という所は過激な地域だったそうだ。吉州では所在の民間会社の社宅に入つて一夜を過ごし、翌日早朝南に行く列車に乗るため吉州駅に行き、再び貨物列車に乗った。だが、列車はなかなか発車しなかった。朝鮮人の動きが変わってきたが、ソ連軍の先鋒隊が間近に迫っていたのだった。交渉の末、やつとので、列車が動き出した。すぐに鉄橋に差し掛かったが、その時、機関砲の「ダー！ ダーッ！」という大きな音と、「ピューー！ピューー！」という小銃の音で恐怖のどん底に落とされた。河川敷に侵入して

きたソ連軍の先鋒戦隊に狙い撃ちされたのだった。列車は立往生し、それっきり動かなくなってしまう。この時の恐ろしかったことは、今になっても忘れることはできない。夜中に何かちよつとした大きな音がすると、すぐに恐怖感が現れてくる。

あまりにも昔のことなので、正しい記憶もだんだん薄れてきているが、それからは城津に向けて徒歩で行動した。城津では、陸軍の兵舎のような所に多数の避難民が収容されており、そこで偶然にも清津小学校の森田勉先生や、清津中学校の教練の先生だった配属将校の大尉にも会うことができた。

城津にいるときに、ソ連兵の略奪に遭遇した。「シギ、ダワイ！」と言われ、持っていた大部分の貴重品を略奪された。「シギ」とは朝鮮語で時計のことだった。夜になると女漁りにソ連兵が来るので、皆で大声をあげ、石油缶をたたき、追い払ったりした。一週間ぐらいそこにいたような気が

する。その間、日本軍の武装解除が行われて、日本兵は捕虜となりソ連兵に連行された。ソ連兵は着ている軍服が良くなかったので、日本軍の軍服を上から引っ掛けて、マンドリンと呼称されている自動小銃を持っていた。

城津から咸興までは徒歩で行ったと思う。途中では興南の窒素肥料会社の社宅に泊まったりした。咸興に着き、日本人会の人たちに迎えられ、いろいろな所に分散宿泊させられた。私たちは、「雀のお宿」という日本旅館に収容された。九月中旬ごろだったと思うが、咸境北道や遠く満州からの避難民で市内はごった返していた。ソ連兵もたくさんいた。「雀のお宿」では、各家庭毎に屋外（みまむし）に竈（かまど）を作り、煮炊きして生活していた。それからが大変だった。発疹チフスや再帰熱などの伝染病が蔓延したが、これは風（しらみ）による伝染病であった。高熱を出して多くの人が亡くなった。左右両隣の部屋で肉親を亡くし、大声で嘆き悲しんで泣く家族の声をよく聞いたものだった。毎日虱捕りが日課とな

っていたが、今考えると本当に惨めなものである。

そのうちに、こんな生活にも馴れてくると、咸興駅前の市場によく遊びに行った。ソ連軍の軍票が流通し始めていたが、基本券はやはり戦前から発行されていた朝鮮銀行券であった。

ソ連兵の家族が豪華な食事をしている所を見たり、高級将校の団に会ったりしたが、彼らは党の理論武装集団か、秘密警察（今のKGB）の要員だったと思う。女性が含まれていることもあったが、一般の兵隊と違い、服装が立派で綺麗であった。

よく集団で二部合奏をしながら行進するソ連兵を見掛けたが、歌が皆上手で、それが日本の兵隊と違うところであった。

朝鮮人のデモにもよく出会った。彼らは革命歌を歌いながら行進していた。終戦により急速できた革命政府の保安隊が組織、指導したものである。

元気な日本人は、朝鮮人の家に働きに行き、薪

割りやリンゴの収穫選別などをして日当を稼いでいたが、親切な朝鮮人は、私たち子供にも傷付いたリンゴをたくさんただでくれた。これは大変に有り難かったことで、リンゴを腹いっぱい食べて空腹をしのいだ。そのうちに、朝鮮人に頼まれ、避難民の親は、二、三歳ぐらいになった自分の子供を預けるようになった。一緒にいても死なせてしまうので、致し方がなかった。

「雀のお宿」についても保安隊員がよく調べにきた。元軍人、元憲兵、元警察官が紛れ込んでいなか、各部屋にまで立ち入ってきて調べて回った。朝鮮人の知り合いが隠れるようにして尋ねてきては、三十八度線を越える手助けをする相談をしていた。

そのうちに、日本軍によって捕虜になっていた米軍兵士を引き取りに、米軍が咸興に来るようになったが、市内は日本人避難民でごったがえしていたので、避難民を減らすために、約三千人の避難民を、富坪の旧日本軍演習地の兵舎に移動させ

ることになった。

昭和二十年十二月二日、風の強い寒い日だったが、咸興市内に分散宿泊していた避難民は、思い思いに荷物をまとめて咸興駅に集まった。市の職員と思われる年寄りが、朝鮮語で「一人、二人、三人」と人数を数えながら改札口を通過させて、ホームに待機していた無蓋貨車に乗せた。当時の記録によると、約三、二八二人の日本人が咸興市内から富坪に移動させられたことだった。

私たちもその日の夕方、咸興の南約四十キロメートル離れた富坪に着いて、駅からぞろぞろ歩いて元陸軍の演習場の兵舎に入った。電気もなく真っ暗だったが、寒さと空腹の中で大豆を煎った携帯食を食べ、ちぢこまって一夜を明かした。

翌朝、周囲を見ると、そこには大型の兵舎が九棟と小型の付属棟が五棟あって、他には何もなく殺風景な所だった。区の会長が協議して宿舎を決めたが、私たちは第五分会となり、西南の端にある約十坪程の倉庫のような建物があてがわれた。

私たちのグループは、我が家族三人と叔父の西島岱造、そして楢崎夫妻の六人だった。

すぐに着手したことは、食べることの用意であった。水は幸いに南側五十メートルぐらいの所に綺麗な小川が流れていたので、ここで炊飯の用意をすることにして、竈を作ったり、薪を集めたりした。初めは手持ちのお米を炊いていたが、それを補充するために近所の農家に着物などの衣類を持って行き、米と交換してもらった。中には子供を連れて農家を回り、食物をもらって歩いている人たちもいた。朝鮮人の部落では、米つきの作業をする若者を求めていたので、兄は住み込みで働きに出ることにした。

十二月から一月にかけては、飢えと寒さと伝染病（発疹チフス、再帰熱）、栄養失調で、多くの人々が亡くなった。後年、「富坪の惨劇」と言われて、北朝鮮からの引揚げの事態の中でも際立って悲惨な事件であった。

平成十四（二〇〇二）年二月に、私たちのグル

ーブの横で一緒に生活していた、長崎県の友永倬夫様より、突然お便りを頂いたが、友永様は当時小学校三年生だった。当時の家族は、祖父、祖母、母親、そしてご本人と弟の五人家族だったが、お父さんは陸軍に召集されていた。当時おじいさんが大変に元気で、甲斐甲斐しく動き回りいろいろな農作物を作ったり、風呂の修理をしたり、井戸の滑車を作ったり、大変お世話になったことをはつきりと覚えていいる。この辺りでは、ときどきソ連軍が演習にきて不要になった物を置いて行ったが、その中には直径三十センチメートル、長さ一メートルぐらいのドラム缶もあった。これを私が拾ってきて、おじいさんがドラム缶の真ん中に円い穴を開け、探してきた。パイプを通し滑車にした。井戸の水を汲み上げるのに滑車がないと不便だったので、これを滑車として使った。また、五右衛門風呂は一部壊されていたが、これもおじいさんが半田はんだでこて蟻付けして直してくれた。おかげでみんなが風呂にも入れるようになった。

そのように、富坪避難所ではお世話になった、忘れがたい一家であった。その友永倬夫様から、思いがけずに便りをもらったのだった。

三 五十七年ぶりに頂いた手紙

その手紙の内容は、あの富坪避難所での悲惨な生活を思い出すに十分な内容であった。それ以来、当手を回想して文通が開始された。友永様からの手紙は次の通りであった。

『前略 突然お手紙差し上げますご無礼の段平にご容赦くださいませ。』

私、清津、弥生町の友永金物店（夏川小間物店隣り。村瀬呉服店前）の孫の友永倬夫と申し、引き揚げ途中、富坪収容所にいた者です。

先日、親戚の大和町、松本ブリキ店（徳田酒店隣り）の長女、統子さん（清津女卒業後、羅南陸軍病院勤務）に久しぶりに会い、引き揚げの回顧談にふけているうちに、「牧山病院」の名を耳にしました。

ついであるが、私の祖父母と父は、明治四十三

年日韓併合のころより清津に在住し、最初に建てた住居が松本さんがいた家だったそうです。

万一、誤っていましたら、お許し願いたいのですが、「牧山病院」との名を聞きましたとき、私にとって終生忘れられない記憶が忽然と胸中に蘇ってきて、失礼をも顧みず筆を執った次第でございます。

実は、私の母は昭和二十年十二月十九日に富坪にて病死しましたが、母の臨終に際し、隣りに起居しておられた病院の奥様が「心残りのないように」と、隠し持つておられた最後の一本のカンフル注射を打ってくださいました。そのご厚意も空しく、母は帰らぬ人となりましたが、あの筆舌に尽くしがたい異常な状況下で、最後の注射を受けられた母は、幸せ者と思う度に奥様の行為が身に沁みて有り難く深く感謝すると共に、決して忘れられない思い出です。

だが、混乱した情勢のもとでは、記憶も定かなくなり、忘却してはならないことにもかかわら

ず、その方の名前を失念してしまい、どうしても思い出せないまま歳月が過ぎました。祖父母も亡き今日となつては確かめることもできずに、心にわだかまっています。

そのような中で、先日松本さんとの話の途中で、その方は「牧山」さんではなかったかと思つたのです。幼い頃の記憶は風化しつつありますが、当時奥様は紺の着物を着て、眼鏡を掛けておられたと思います。そしてお子様が二人で、眼鏡を掛けた小父さんがおられたように思います。もしも、あのとときの奥様があなた様のお母様でしたら、あのとときのご厚意に対し、積年の想いをこめてお礼を申し述べたいと存じ、失礼をも顧みずお手紙差し上げた次第です。

なお、私は定年を機に、あの未曾有の体験を風化させることなく、孫たちへ語り継ぎたいと思い、引揚げの記録を記しましたので、「富坪」の項を送らせていただきます。拙文ながら、ご一読くだされば幸甚に存じます』

と書かれてあった。

家族で避難する準備をしていたときに、母が父の使っていた携帯用の注射器セットと共に、カンフル剤とビタミン剤のアンブルを、リュックサックの中に入れていたのを思い出した。道中におけるソ連兵の略奪にも遭わず、注射器とアンブルは無事にリュックサックの中に残っていた。そして富坪の収容所で母が一人の病人に、いつも父がしていたように、鍋にお湯を沸かして注射器を煮沸消毒し、注射した。だれにしたか特定の人の名前は覚えていないが、臨終状態になっていた方に思い残すことのないように、母が注射をしたの思い出した。それが、手紙の主の友永さんのお母さんだったのだ。すぐに私は、思い出したことをそのままに友永さんに電話で話をした。

そして数日後、再び友永さんより手紙をもらった。

『前略　お電話有り難うございました。

手紙が届きました日が、ご母堂様のご命日です。

たとは、これも亡き母の導きかと、因縁浅からぬことと思いました。あのことのご厚意に対する感謝の念の万分の一角が、五十七年ぶりに果たせたとの思いで、心のうちはいっぱいです。

叔父様の西島岱造様につきまして、早速長崎大学の同窓会名簿にて調べましたところ、大正八（一九一九）年卒業で、第十二回生であることが分かりました。

私は昭和三十四年の卒業ですので、実に四十年先輩にあたります。後日、同窓の先輩になられる方と富坪で居を同じくしたことに、不思議な縁を感じますと共に、ご卒業の年はヨーロッパではパリ講和会議の開催、朝鮮では独立運動（三・一運動）が起きておりましたので、我が国の領土拡張期から一転して敗戦による国家崩壊への道と、まさに激動の時代を生きられた大変なご生涯だったと拝察します。

あなたは当時清中二年生だったとのことですが、当時弥生町での清中生は村瀬（呉服店）の長

男の方だけだったように記憶しています。弥生町界隈では、羅中の塩島（骨董屋）、秀川（材木商）、福泉町の松井（海洋少年団初代団長）、入舟町の徳弘（富坪にて家族は全員死亡）、商業の下川（税関前の食堂）、工業の浅田（印刷屋）、水産の桑野（病院）、清女では渡辺（風月堂菓子屋）、辻（夏川小間物屋）などが同級生だったのではないのでしょうか。かなり上級生の方々によく遊んでもらっていましたが、懐かしく思い出します。そういえば、徳田君も同級生ではありませんでしたか。

思い出話が長くなりましたが、僭越ながら、生前父が所有していました昭和三、四年ごろの清津の写真の複写版と、駄文数稿を同封しますので、一読いただければ幸甚です。

目下、税関前北星町上り口の朝鮮銀行の建物を思い浮かべながら、多田井喜正さんの著書「朝鮮銀行・ある円通貨圏の興亡」を読んでいます』とあった。

この手紙を受けて、私もいろいろと思い出し、

懐かしい気持ちでいっぱいになって、次のような返事を書いて出した。

『拝復 寒さも緩み春めいてまいりました今日このごろです。

お手紙と各種の資料を頂き、有り難うございました。小生も定年になってから全国清津会に入会し、数回会報に投稿して自分の思い出を吐露いたしました。全国清津会の総会には、過去二回出席しました。

富坪での思い出は、頂いた資料により、より新鮮に思い出されました。

友永さんのお祖父さんのことは、はっきり覚えていません。いつもかいがいしく動き回っておられたお姿が目には焼き付いています。小学校三年生であつたあなたと弟さんの姿、そしてお祖母さんのことも覚えていません。しかし、あなたのお母上のごとは記憶にあります。

富坪の収容所で小生のグループは、あなたの描いたスケッチの通り、反対側の角に六人で起居し

ていました。

清津会の会報に載せた「全国富坪会の呼び掛けとその反響」に、あなたのお名前を書き入れたものを同封いたします。

これからも新しい情報があればお知らせください。あなたの弟様および奥様とご家族の方々にもよろしくお伝えください』

という内容の返事を出したが、友永様から送ってもらった資料は次のようなもので、実に当時の様子を詳細に書いてあり、その文才に頭の下がる思いであった。「三十八度線を越えて」という内容で、清津脱出から当時の城津・咸興の様子、そして富坪での惨劇、そこからの脱出、三十八度線を越えて、祖国日本に引き揚げたことなど、一連の状態で書かれてあった。友永様の手記は事実が詳細で明確に記載され、思い出が蘇ったものだった。

友永様との手紙のやりとりはそのぐらいにして、私の体験に戻します。

四 富坪での生活

兄昭彦は、一里程離れた農家に米つきの仕事に雇われて住み込みで働いていたので、ときどき会いに行っては米をもらってきたり、目印の松の木の下に隠してある卵を持ってきたりした。その農家の近くの松の木の下に枯れ葉をいっぱいにかけて隠してあり、兄とは前もって示し合わせてあったのだが、農家の家族が勘のよい人で、警戒心を深くした目で見られていたので、私は一旦帰るふりをして家族の目をそらし、しばらくしてから引き返し、松の枯葉の下に隠してあった卵をポケットに入れて持ち帰ったものだった。私たちの五分会の分室に眼鏡を掛けた綺麗なお姉さんがいて、体が弱っていたので大事に持ってきた卵をあげたこともあったが、そのころの卵は本当に貴重品であった。しかしその後、お姉さんは亡くなられたが、結核だったそうだ。

鉄の斧を持って半里程離れた山に行き、手ごろな松の木を切り倒し、薪にするため担いで帰った。

これを適当な長さに切り、薪にして保存した。暇などときにはよく山に行き、枯木などを集めてきたものだった。わらじ作りをしたこともあった。糊藁を叩いて柔らかくして、縄を編み組み上げていくのだったが、山に行くのに重宝した。兄は住み込んだ農家での作業で、藁縄編みが上手になっていた。

中野さんは奥さんと娘さんとの三人暮らしだったが、建築の棟梁として近くの村に住み込んで、村の集会場を建築した。その村には大工がいなかったのか、日本人が頼りにされた。中野さんは病気がりだったので、頭が丸坊主になっておられたが、だんだん元気になられたようだった。生きていくためには何かしなければならなかった。二カ月ぐらいかかったと思う。清津では手広く建築関係の仕事をされていたことを思い、今でも顔が目に浮かぶ。

松本さんには息子さんがいたが、清津中学校から予科練に行かれていたので、余計印象深く思い

出す。松本さん自身は大柄な人だったが、奥さんと、結婚して子供もいた娘さんと三人がここで亡くなり、小学生の娘、ユリ子ちゃん一人が残されてしまったが、叔父の西島さんがこの子を引き取り一緒に日本に帰り、山口県の阿川で成人された。

はつきりとは思いませんが、予科練の制服を着た若者が一人、一月ごろだったか、私たちのグループに入ってきた。近くの飛行場の航空隊にいたそうだが、結核を患っていたので、民間人の集団に入れられたのだった。この人も一カ月ぐらいい一緒に生活していたが、亡くなってしまった。

このような苛酷な収容所では、一人で生きていくことは大変なことだった。死んでしまうと墓場に行く前に、衣服は全部剥ぎ取られてしまった。

あまりにも死亡者が多く出るので、ソ連軍の将校が視察にきたことがあった。その後、塩秋刀魚とか米とかが配給されるようになった。平壤（ピョンヤン）から米を積んだ貨車が一両、富坪に届き、それから米の配給が正常になり、生き永らえ

た。

虱退治のために、ソ連兵が高圧蒸気缶車を持ってきて、各分団毎に避難民を集合させて、男も女も区別なく着ている衣服を脱がせて丸裸にして、各人毎に衣服をまとめて、高圧釜に放り込み、高温高圧蒸気で蒸し上げてくれた。虱を撲滅させるための強硬手段であった。一時間ぐらい待っていると、自分の衣服が戻ってくるが、衣服は濡れていなくてぼかぼかと暖かい感じであった。虱もその卵も高圧蒸気で完全に死に絶えていて、息苦しい避難生活の中でこんなにさっぱりしたことは初めてであった。ソ連軍に虱退治の汽缶車が常備されていたことには驚きだった。

日本軍の将校の奥さんで、赤ん坊連れの人組が、この第五分団の分室におられた。三人組だったかもしれないが、記憶が定かでない。子供連れで女一人が生きていくには大変なことだった。現地除隊したらしい東北訛りの三十歳代の男性が、やはり二、三人いて、これらの奥さんたちとペア

になって面倒をよく見ているのを見た。この人たちは我々とほとんど行動を共にしていて、元山から三十八度線を越え、京城（ソウル）に着くまでは見届けたが、その後の消息は分からない。

五 富坪からの脱出

いつまでもここには、日本に帰ることができないので、大人たちが相談を始めた。ここでの我々日本人に対する監視は朝鮮人の保安隊員であった。元日本軍の兵士の服装で、襟章、肩章だけを変え、各人は日本軍から没収した九十九式の歩兵銃を持ち、各分団が生活をしている収容所内をときどき見回りにきていた。年を越し、昭和二十一年の二月から三月ごろになると、保安隊の考えも表向きは「収容所から一切逃亡などしてはいけない」ことを強調していたが、反面本音は「日本人の厄介者は早く出て行って欲しい」と考えていたようで、そのように思われることもいろいろあった。

気候が温暖になったので、徒歩で野宿をしなが

らでも元山に行くことがみんなの意見で決まった。四月のはじめごろになって、まず我々のグループと別の人たちが行動を共にしようという人たちとで十五人ばかりの集団を作り、必要最小限の身の回り品だけを持ち、夜明けを待って富坪を脱出した。今になるとはつきりと思いつけないが、五日間ぐらい歩いて元山に着いた。途中現地人の家に泊めてもらったり、軒下で夜露を凌いだりしながらの強行軍だった。

元山では日本人会の人に迎えられる、市街地にあるお寺に案内されて食事を与えられ、畳敷きの広い部屋でごろ寝をしたが、久しぶりに手足を伸ばしてゆつくりと休んだ。このころになると国内も落ち着きをだんだんと取り戻し、列車も定期的に運転されるようになっていた。列車は主として朝鮮人たちの旅行用に使われていたが、その列車に日本人である我々を紛れ込ませてくれたのだった。多くの日本人を制限された列車で輸送しなければならず、当然に順番待ちということが起きて、元

山で一週間ぐらい止められて、このお寺で生活をしていた。

このお寺で、清津にいた宮崎県出身の那須さんに会うことができたが、蜷シヅメのみそ汁を鍋にいっぱい入れて持ってきてくれて、とてもおいしく食べたことを覚えている。

元山は私が小学校一年生として泉町小学校に入学したことももあり、知人も多い所だった。母がいろいろな人と再会して、おしゃべりに夢中になっていたことを懐かしく思い出す。ここで起きたことで忘れてはならないことが一つある。それは平戸藩出身であるという某氏から「平戸藩 高分帳ノ類」の書き付け帳を頂いたことである。これは安政二年編ということで貴重な文献で、後年これが牧山家の唯一のルーツ探しの源となった。これのおかげで牧山家の先祖が、一五〇〇年代から平戸藩第二十六代松浦法印公にお仕えしていたことが判明したのである。

一週間ぐらい経って、やっと列車に乗ることが

できた。乗ったのは思い掛けず客車であったが、朝鮮人が先に乗り込んで、我々日本人はあとからの乗車なので立ちん坊だった。終戦前ならば全く反対の立場で、敗戦の悲哀をつくづく体験した。車内ではお互いに無言の行であった。満員の列車は走り出した。記憶が薄れているが、三十八度線手前の漣川まで行ったと思う。満員列車では、途中からはこの列車に朝鮮人とかソ連兵は乗れないので、我々日本人グループは平康か鉄原（記憶が定かでない）で列車から降ろされた。我々が降りていたら、入れ替わりにソ連軍の兵隊に親切にされながら、赤ちゃんと二、三歳の子供を連れた日本人の女性が列車に乗り込んだ。ホームでなく線路上なので、デッキの昇降口が高く、ソ連兵が親切に押し上げていた。

我々はそこから三十八度線まで歩いた。途中で朝鮮人が近付いてきて、西島の叔父とぼそぼそ話し込んでいた。徒歩の道を教えてもらったのである。後から聞いた話では、朝鮮人の話に騙されて

追い剥ぎに遭い、金品を取られたグループもあったとのことだったが、その時は叔父が幾ばくかのお金を払っていた。

いよいよ漣川に着いた。国境の川を渡るのに、一人なにかのお金を支払った。川幅は約二十メートルで、水量は多く流れも早かった。小型の舟に乗せられて、朝鮮人が二人で櫓を漕ぎ対岸の東豆川に着いた。ここは南朝鮮で、アメリカ軍の支配地域であった。

アメリカ兵がチューインガムを噛みながら二人で歩いてきて、我々を誘導してくれた。やつと自由な世界に入れたと実感した。ここに来ると、避難民の扱いは流れ作業であった。まずDDTの散布を受けた。下着の中からと、女性の人は髪の毛の中まで吹き付けられ、真っ白になった。伝染病予防のための虱退治であった。今ではDDTは使われないが、その時分はDDTの全盛期であった。やつとさっぱりした気分になった。乾パンかクラッカーのような食べ物をもらって、コーラと一緒

に食べたことを思い出す。

京城行きの客車に乗せられて、午後に京城駅に着き、日本人会の男の人が迎えてくれた。大きな門の前を通って日本式のお寺に入れられて、一晩泊まったか、あるいはその日だったか正確なことは忘れたが、再び列車に乗せられ釜山に着いた。

釜山港で朝鮮人の役人の簡単な出国検査を受け、待機していた日本の船に乗り込んだ。そこでは父の友人で軍医だった人が、自分の家族の到着を待ちわびながら、医者としての勤務に就いていた。

この人は清津の家に二、三回軍医として遊びにくてくれたこともあって、私も覚えていた。写真など撮ってもらったことのある人であった。名前は忘れたが、あとで対馬の人であると聞いた。

乗船した船は上陸用舟艇「SB1-14号」だった。戦車や車両を上陸させるために、船の前が大きく開くようになっていた。船員はもちろん日本人であった。この船には約五百人が乗船した。船底にごさを敷いた所に座っていた。玄米のおにぎ

りが配られたが、久しぶりの米食でおいしく食べた。この船は何かの本に書いてあったが、戦争末期に呉の造船所で造られた戦時量産型のSB型であった。このころに、中国、日本、朝鮮など東南アジアでコレラが発生し、船上でコレラの感染者がいなかったか検査が行われた。

五月の終わりごろから、六月初めのころだったと思う。一晩で博多港に着いた。コレラ菌を持っていないかどうかの再検査があって、ガラスの棒をお尻に入れられた。検査結果が判明するまで、一週間から十日ぐらい博多港沖合いに留め置かれた。日本の地を目の前にして上陸できないことは、本当に苛立たしい思いだった。

博多湾では、アメリカ兵がモーターボートに乗って波を切って走り回っていた。持てる国の豊かさをまざまざと見せつけられた気がした。

上陸待ちの船に、順番に「歌謡慰問団」がきて歌謡曲などの流行歌を聴かせてくれた。日本に到着して初めて聴く歌である。そのころ大流行をし

ていた「リンゴの歌」も、ここで知った。

やっとのことで上陸を許されて、「S B 一四号」は博多港の岸壁に接岸して、我々は感激しながら上陸した。長い長い避難民生活から解放されたのだった。国破れたりとはいえ、日本にたどり着いたのだ。

祖父が朝鮮に渡ってから何年ぶりの帰国だろうか、はつきりは分からないが明治四十年ごろからとすれば、約三十九年ぶりの帰国ということになるのだが、その姿は哀れなものであった。私は十四歳になっていた。

博多港に上陸後、帰郷のための諸手続を済ませたが、これといった帰る家がないので、まずは西島の叔父さんの実家に世話になることとなり、博多港駅から門司港駅まで汽車に乗り、関門海峡を渡し舟で渡り、下関駅から山陰線の列車で阿川駅に着き、叔父さんの実家に落ち着いた。

母の妹、久子叔母さんとその家族にも初めて会った。祖父、祖母も健在で優しく迎え入れてもら

った。

だが、今までの疲れが出たのか、みんなは病気になるに苦しんだ。その病気は、「再帰熱」という熱病の一種で、私も一週間ぐらい寝込んでしまった。それでも幸いに軽かったが、母は重病で死ぬかもしれないと言われて、随分心配したものだ。一週間ぐらい経ったところに、宇部で眼科医をしている母の弟、古市さんと、母の妹の主人である市川さんがそろって見舞いにくれて、宇部に移るように言ってくれた。

ようやく元気になった母は、兄と私を連れて宇部に移った。昭和二十一年の七月の暑い日のことだった。

六 引揚げ後の生活再建

父が、ソ連軍の捕虜になってシベリアに強制抑留されていたので、私たち母子は叔父に扶養してもらいながら、兄と私は県立の宇部中学校に通い始めた。そのうちに父の弟が、戸畑にすることが分かり、私はそこに引き取られて戸畑中学校に転

校した。

父が、昭和二十四年の秋に舞鶴に帰還し、家族そろって小郡駅で迎えた。それからの父は、本籍地の平戸で医師として勤務することとなり、平戸市に定着した。それに伴って私も平戸高等学校併設中学校に再度転校し、ここで初めて家族がそろって同じ屋根の下で生活することができた。

それからは平穏な月日を過ごしていたが、父が職場を変えて宇部曹達株式会社診療所長となったので、一家は宇部市に移り住み、私も宇部高等学校に転校、昭和二十七年四月には山口大学文理学部の理乙学科に入学し大学生となったが、自分の将来の方向を考えた結果、進路を変え理工学を専攻したくなり、名古屋の名城大学理工学部機械工学科へ転学して、そこを卒業してサラリーマン生活に入った。就職先は、名古屋市に本社のある中堅自動車部品のトップメーカーで、定年まで勤めあげた。

昭和五十年には技術研修のため、イギリスをは

じめヨーロッパ主要五カ国を、五週間に渡って研修したことが深い思い出となった。

定年退職後、名古屋市にある自動車整備専門学校の講師として五年間教鞭を執り、新たな経験もした。さらに六十六歳からは、カワイ音楽教室に通ってピアノのレッスンを受けていて、現在は六年生になったが、毎年の発表会と、年末のクリスマスには必ず出席して演奏している。また、それとは別の余技として、現在は日本紙飛行機協会の会員になって紙飛行機作りに精を出しているが、平成十四年九月に名古屋ドームで開られた、全日本紙飛行機選手権大会に出場し、決勝大会まで進んだ。今は、地元で子供たちに紙飛行機作りを指導している。

子供は娘二人で、それぞれ健全な家庭作りをしていて、孫も四人いる。現在は家内と二人で平和な毎日過ごしているが、これも日本が平和であるからのことで、感謝の極みである。

五十七年ぶりに届いた友永さんからの便りから、

かつての苦しかった日々のことを思い出して、再び日本があのような悲惨な事態を繰り返すことのないように祈りながら、まとめた次第である。

北朝鮮からの逃避行

福岡県 有馬 健二郎

一 生い立ち

私の育った清津府は、ソ連邦との国境から約百キロメートル南に位置し、満州と日本を結ぶ人物資の大動脈の要点として発展した街で、北部地区の清津には港湾施設と商業街が、南の羅南は咸鏡北道の道庁と第十九師団の司令部があり、街の大半は軍隊の施設で占められていた。

日本海に沿ったその間十六キロメートルは、道幅約二十メートルの舗装道路（清津街道）と、咸北線の鉄道によって結ばれており、その沿線には三菱製鋼、日本紡績、日本製鉄などの工場群と大手水産会社の漁港、水揚げ鮮魚の加工処理場、油脂タンクなどが延々と並び、発展途上の工業地帯を形成していた。

昭和十七（一九四二）年、国民学校入学までを